

00年代日本の言論における「新自由主義」レッテル

テキストマイニングによる分析

首都大学東京 左古輝人

この報告は、00年代日本で公刊された、「新自由主義」を主題とした膨大な図書群において、「新自由主義」という語句が何を指していたかをテキストマイニングにより明らかにする。

こんにちビッグデータ研究と総称される学術動向の進展と連動して、自然言語処理の技術も長足の進歩を遂げている。それにより、普通の《読む》行為では太刀打ちできない巨大テキストコーパスを統計的に処理し、人文・社会科学的に有意な知見を得ることが可能になってきた。こうした研究諸手法を総称してテキストマイニングと呼ぶ。

「主義」と呼ばれる事物の多くは、その当事者の擁する思考や行動の様式を指す一方で、当事者がそう自称することはほとんどない。それは「主義」が、当事者以外の立場から剔出・暴露された、当事者自身の内に隠された、あるいは潜在する様式を指すためだ。「新自由主義」は、まさにこうした「主義」の一種である。

この報告では以下3点を明らかにする。1) 2000年代日本における「新自由主義」の場合、時の集団的意思決定権を握った人々の思考や行動の様式が、従来と大きく異なることを指摘するために生み出されたレッテルだった。2) それは1980年に前後する英米の政策転換（産業競争力の重視と社会保障の圧縮）が *neo-liberalism* と呼ばれていたこととの類比で「新自由主義」と呼称されたが、3) その内実には80年代とはかなり異なる諸要素が含まれていた（特に顕著なのは教育の変容論、米英の策謀論、格差拡大の元凶論）。

「主義」の指摘は、悪くすると独りよがりな決めつけや水掛け論に墮することがあるが、良くすれば我々のリアルタイムの生存条件に関する有益な知識をもたらすこともある。この報告はテキストマイニングの技法によって「新自由主義」についての言論を広く収集、分類、分析することにより、後者の効能の最大化を図る。

参考文献：Holbrow, 2015, *Language and Neoliberalism*, Routledge. 松村・三浦、2014年、『人文・社会科学のためのテキストマイニング』誠信書房。左古輝人、2014年、『『ジェンダー』とそれを取り巻く語彙の変遷 1980年代-2010年』『ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究 基盤研究C 研究成果報告書』。